

氏名	宮 原 潔
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	乙 第 1355 号
学 位 授 与 の 日 付	昭和58年3月31日
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者（学位規則第5条第2項該当）
学 位 論 文 題 目	糖尿病に於ける末梢血単球に関する研究 第1編 単球走性について 第2編 単球ライソゾーム酵素活性について
論 文 審 査 委 員	教授 長島秀夫    教授 太田善介    教授 栗井通泰

### 学位論文内容の要旨

末梢血単球機能の変化を糖尿病状態に於いて検討した。第1編では48例の糖尿病と27例の健常対象を用いて単球走性を測定した。測定は Nuclepore 膜を使った Boyden chamber 法を用いた。その結果糖尿病状態不良群では、対照および糖尿病状態良好群に比べて有意に走性低下が認められた。治療法による差は無かった。更にインスリン治療により糖尿病状態不良を改善すると走性も正常化することが認められた。

第2編では2種のライソゾーム酵素活性を細胞化学的染色法により測定した。その結果 $\beta$ -galactosidase は23例の対照に比し49例の糖尿病ではその活性に有意差は認めなかった。non-specific esterase は37例の対照に比し41例の糖尿病では単球酵素陽性率には差がなかった。しかし活性段階別分類をすると糖尿病では高活性単球は減少し逆に低活性単球が増加していた。糖尿病状態不良ではこの傾向が著しい。

以上より糖尿病状態では単球機能の異常を介して細胞性免疫系の変化が示唆される。

### 論文審査の結果の要旨

本研究は糖尿病における末梢血単球の走性および2種のライソゾーム酵素( $\beta$ -galactosidase, non-specific esterase) 活性を細胞化学的染色法により測定し、それらと病態との関連を詳細に検討し、糖尿病状態では単球機能の異常を介して細胞性免疫系の変化がおこる可能性を明らかにした。

よって、本研究は価値ある業績であると評価し、本研究者は医学博士の学位を得る資

格があると認める。